

7 書教育分科会

共同研究者 野坂 武 秀
(北海道音更高等学校)

1. はじめに

毎年のことだが、書教育分科会の課題は、参加者の確保である。原因ははっきりしている。第一に、単独の教科科目(芸術科書道)がある高等学校では、他の芸術科目である音楽・美術では教員採用試験があり、単独教科として成立しているのに対し、書道だけが採用試験が実施されず、別教科にもかかわらず国語の免許での採用になっていて、書道の授業を実施している学校は全道で100校以上あるにもかかわらず、書道



専任で仕事をしているのは全体の三分の一に満たないと思われること。そのため書道の教員は、教科をまたいでの授業、特に国語の指導で苦勞していて精神的な余裕がないこと。そのうえ、書道の教員には、小中高校生の展覧会活動の運営にかかわったり、自分も作家活動をしているものも多く、さらには、校内での賞状・看板書きなどの雑用も多く多忙であること。そしてもう一つ、書道の授業に関していえば、それぞれ自分の得意分野での単独授業のため、お山の大将で、自分の授業を省みることに無頓着なことが考えられる。

次に、小中学校の書写に関していえば、実はとても苦勞しているにもかかわらず、国語という大きな教科の一部分でしかないため、書教育分科会という独立した分科会には、少し足が遠ざかってしまうということのようだ。

このような実態を踏まえ、書教育分科会では、共同研究者と司会者は必ずレポートと生徒作品を持参し、何気なく覗いた参加者に話題提供しながら進められるように準備するとともに、手薄になりがちな小中学校書写の分野を補強するために、私が取り組んでいる小中学校での出前授業での体験レポートを、毎年の焼き直しになるかもしれないが、必ず提示出来るように心がけている。

さらに今年は、このところ毎年訪れてくれている大学生にも対応出来るように、ワークショップ

にも取り組んだ。大学生の多くは小学校や支援学校希望者であることから、墨紙筆の道具を持ち込んで、実技体験を通して毛筆書写で大切にしたいことを知ってもらいたいからだ。今回は、この様子も紹介しながら、報告を進めたいと思う。

2. 高校における一人教科の実態から

前述の通り、書道は一人教科のお山の大将になりやすい性格を持つ。これは、必ずしもお山の大将を否定しているわけではない。書道のような実技教科の場合、生徒にとっては、いかにもプロを感じさせる模範実技を見せてくれる教員は、安心感を抱かせ、絶対的な価値観をもたらすからだ。都市部においては、書塾の先生の中には作家活動をしている方も多く、技術的にも高いレベルの先生がいるのだが、地方では、書塾の先生とはいっても、通信添削で資格(これは公的資格ではない)を得て塾を開いている人がほとんどのため、小中学校レベルの「お習字」としては上手なのだが、高校で教える芸術としての書道にはなかなか至らない。そのため、「お習字」の延長としての認識で高校書道を選択した生徒が、高校教員の実技を見て、書道に興味を持つということは少なくない。実際に私自身も、高校での書道に驚きを持ったことがきっかけで今に至っている。

ところで今回は、たまたま以前この分科会での司会経験もある常連の二人が、偶然にも4月に新任校に転勤しての苦労話を交えたレポートを報告してくれたので、その話題から進めてみたい。

砂川高校・中谷報告と滝川高校・小笠原報告は、ともに新任地からの報告だった。条件はそれぞれ違うが、前述の書道教員の置かれている実態が浮き彫りにされている。どの学校がどうという問題も残すので、二人の話題から参加者から出た問題点を次に紹介する。

①兼任と教科時数の問題

北海道では、札幌市内校と一部都市型高校・総合学科を含む単位制高校をのぞけば、小規模校が多い現実から芸術三科目(音美書)を開講している学校は少ない。これ自体が、子どもたちの教育を受ける権利を保障しているとはいえない。だからといって、小規模校をなくしては、北海道の地方町村の存続にも影響を及ぼしてしまう。その狭間で、芸術科教員はどの科目も苦労を強いられる。

地方の間口減は進む一方だが、少子化も加わり、都市部でも間口減は進んでいる。それに加え、前回の学習指導要領改定で芸術科の必修単位が3から2に減らされたために、都市部の大規模校でも芸術科三科目の教員が、全て専任というのは稀になっている。たとえば、大規模校と言われる8間口校を例にとっても、芸術Iの必修だけだと、2クラス3展開で4クラス、芸術科教員は8時間しか持ち時間がない。

ある学校では、書道教員は国語を持つから良いとして、音楽・美術教員は、できないに關係なく情報などのTT補助として時数を調整している実態や、三科目を二科目に変更して美術か書道を

講師にふりかえる。その時、多くの場合は、卒業式などの儀式で必要な音楽が優先され、次に国語の免許を持つ書道が優先される。結果として、書道教員のほとんどが、国語との兼任になるのだ。そのため、都市部・大規模校への異動が必ずしも専任への道とは限らない悲しい現実がある。

また、このような過当競争の中だからこそ、既得権が優先される。芸術科目の年齢構成や、その学校での勤務年数により発言権に差が出来、選択科目の設定や、他教科との兼務に差が出てくる。たとえば今回のひとは、前任者は国語と兼務なしの書道専科でいたにもかかわらず、移動したばかりの教員には兼任を迫られたという。この学校の場合、書道の持ち時間が8時間しかないので無理もないのだが、しばらく書道専科でいて国語を持つのは辛い。私自身も、かつての転勤の時には、似たような経験をしたのでよくわかる。

②用具用材、教材費の徴収と授業スタイル

前述の通り、お山の大将スタイルの授業では、同じ教科書を使っているにもかかわらず、授業スタイルには大きな違いがある。授業スタイルの違いは、書道の場合、使う用具用材や、教材費の徴収の仕方にも大きな違いを生む。これが、書道Ⅰだけの設定ならば、毎年生徒は入れ替わるので、前年度までのことはあまり気にせずに変革を断行するのだが、二年・三年と継続履修者がいる場合には、前任者のやり方を聞きながら、手探りで始めざるを得ない。今回の二人からの報告には、この部分の苦労が一番色濃く報告されている。

篆刻（ハンコを彫る授業）の導入時期、作品提出のさせ方、公募展への出品の有無、使用する筆の購入、半紙や墨の購入、ペーパーテストの有無、学校設定科目の有無、などいろいろ大変な問題だ。

この分科会に何度も参加している教員は、お互いに他人の実践を取り入れてみたり、上手いかなところはアドバイスをもらったりしながら来ているので、比較的柔軟な授業形態をしていて、年度途中であっても臨機応変に工夫を加えることに慣れてはいるのだが、それでも新任地での最初の半年は、悪戦苦闘している様子がうかがわれた。

3. 高校の授業実践から

①「いろは」「早口」「オノマトペ」

砂川高校に転勤したばかりの中谷報告には、今回も以前から取り組んでいた「いろは」「早口」「オノマトペ」が登場した。中でも「オノマトペ」の授業は、中谷オリジナル的な要素が強く、他校にも広がりを見せている実践だ。



私達の分科会では、自己表現の力を引き出す実践の導入として、生徒がイメージを作りやすいオノマトペは、いろいろなバリエーションを加えながら取り組まれている。中谷さんは、生徒への語りかけも軽妙で、学年や学校が変わっても、少しずつ手法を変えて取り組んでいる。

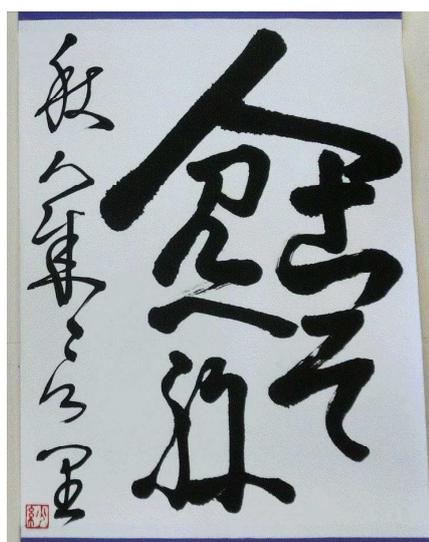
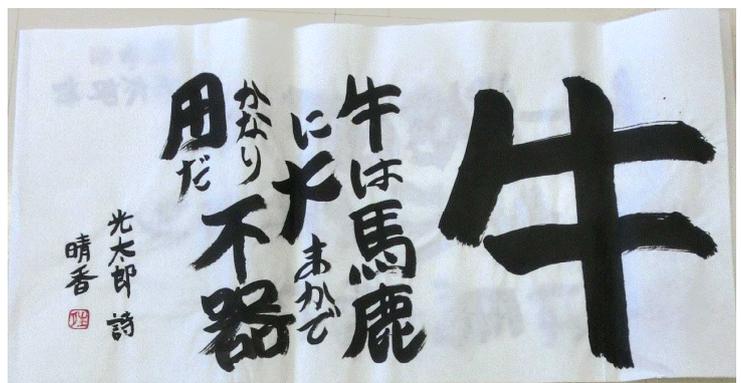
今年の導入では、いきなり文鎮を落として、生徒に「今なんて聞こえた？」と問いかけ「カランカラン」「コロココロン」「チャリンチャリーン」など人それぞれに聞こえ方が違う面白さを発見させ、多様な表現に結びつけている。

中谷さんはこの実践を10年以上取り組んできていて、今回久しぶりに過去のレポートを振り返り、「生きたコトバを生きたまま紙に返してあげる」という当初考えたコンセプトを再提示している。考えさせられるひとことだと思う。

②高村光太郎「牛」の実践

東川高校の伊丸岡報告では、全国でも定番といえる「牛」を今年も持参した。高村光太郎の「牛」は、とても長い詩なのだが、牛の姿になぞらえて、人間の生き方を問うような内容になっているのが特徴だ。伊丸岡報告でも「詩に自分の姿を投影」と書かれているが、そこが詩の持つ文学作品としての力なのだと思う。詩に共感することで、自分の中にある感情を筆に託すことが出来るのだ。

そういう点では、見学旅行で取り扱われることが多い「ヒロシマ原爆詩」も同じことがいえる。今まで全国各地でさまざまな実践報告を聞いてきたが、ほとんど失敗の例を聞いたことがない。



③地域教材としての「下の句かるた」

もう一つ伊丸岡報告から、「下の句かるた」を取り上げたい。ご存じ百人一首のかるたなのだが、「下の句」を読んで下の句の札をとる形式は、北海道独自のものらしい。伊丸岡さんは、変体仮名の学習や文字の配置構成の学習として以前から「下の句かるた」に取り組んでいる。

東川高校では、毎年全校かるたとり大会が開催されることもあり、大会会場となる体育館に、書道の授業で取り組んだ作品を飾って会場の雰囲気盛り上げる。

地域の文化、学校の文化と結びついた実践でもあることから、この実践は注目される。

④卒業式に書道作品を飾る

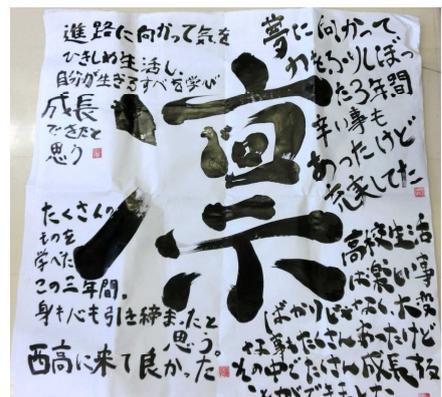
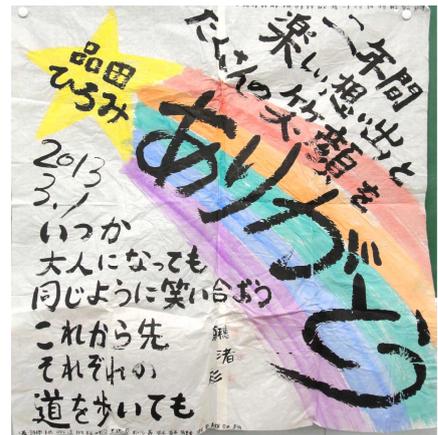
学校の文化ということであれば、書道作品の校内掲示は大切な取り組みだ。小学校などでは、よく教室の後ろに習字作品を掲示したシーンを目にするが、高校では必ずしも多いとはいえない。そんな中、音更高校の野坂実践では、早くから高校の卒業式に書道作品展示に取り組んできている。

当初は、校歌を書いて展示するところから始まった実践が、最近では校歌とともに、卒業生の共同作品によるメッセージをあわせて展示するようになった。共同作品の授業での取り組みは、北海道ではまだ少ないが、全国の実践ではかなり以前から見られるものだ。

それが、最近では書道ガールズという映画以来、書道部のパフォーマンスが広まったことで、少しずつ取り組みが始まってきた。それを、学校行事に結びつけたのだ。

同様の取り組みは、苫小牧西高校の磯角報告からも見られる。右の上は音更高校、下は苫小牧西高校の作品だ。少しタイプは違うが、ともに卒業生のメッセージとしての共同作品だ。

共同作品は、さまざまな可能性を持つ。最近私は、小学校の出前授業の中でも取り組んだ。下の写真は、昨年度で閉校になった音更町立豊田小学校の閉校記念作品である。小学2年から5年生まで11人で、下の作品に取り組んだ。一人一行ずつ書き進み、大きな「絆」という文字は、11人が一画ずつ最後に書き入れた。現在は、地域の研修施設として再利用される小学校の体育館に飾られている。



高さ 4.5 m × 横 8 m の巨大な作品。下に寝ているのが児童と担任+私。上は見学した保護者。

⑤変化と統一、バランスの学習

芸術科書道では、創造的な作品を作り上げるために、さまざまな基礎訓練を積んでいく。大きく分けると、「線」「墨色」「配置と構成」の三分野になる。中でも難しいのが、配置と構成だ。東洋の美は、「わび」「さび」の言葉に見られるような簡素な美しさが思い浮かぶのだが、簡素な味気なさを補うのが構成による変化と余韻である。

右の写真は、西洋風のフラワーアレンジメント（上）と華道（下）の作品である。豪華に盛り付けられたフラワーアレンジメントに対し、華道の作品はとても簡素なことがわかる。しかし、良く見ると、上が左右対称であるのに対し、下の華道の作品は左右非対称なのに気づく。簡素になることによる味気なさを、非対称に組み立てることで動きを加え、空間への働きかけで余韻を醸し出す。これが東洋美の特徴だ。



滝川高校の小笠原実践では、いつもこのテーマに、独自の基礎訓練を取り入れている。「吉」という左右対称の単純な文字を、あえていろいろな形に変化させてみている。アンバランスを作ることで、その中から変化のあるバランス構成を見つけ出そうとしているのだ。美しく整った「恵



風」は行書の名作、王羲之の「蘭亭序」の部分だが、行書の美は動きのある変化の美なので、このような基礎訓練を積まないと、ただ形を整えることに気をとられ、味気ないものになってしまう。小笠原さんは、まだまだ試行錯誤と述べているが、試行錯誤の中からこそ真実が見えてくるものだ。

4. ワークショップの取り組みと小学校書写の導入

前述のように、今年是要項にもワークショップに取り組むことを入れてもらい、来るか来ないかわからない小学校の先生方と、たぶん来てくれるだろう大学生に照準を合わせたワークショップ「小学校毛筆書写の導入」に取り組んだ。期待通り参加してくれた大学生と、高校国語ながら参加してくれた教員相手に実施することが出来た。

内容的には、音更高校の野坂が地域の小中学校教員向けに実施している講習の中から、時間を 30

分程度に絞って取り組んだ。この内容は、レポートとしても発表しているものであり、実際に地域の小学校の出前授業でも取り組んだものなので、その中身を加えて紹介したいと思う。

①筆を立てる

筆にたっぷり墨を付けたら、最初は必ずラセンから始める。これは小学生も高校生も大人に教えるときにも変わらない。コツは、条件を少しずつ増やしていくこと。まずは、一筆で何本かの線を一気に書く、次は少しスピードを付けて、次は○の大きさをそろえて。次は細い線で・太い線で、今度は逆回り、というふうな時間と受講者の状況に合わせて条件の増やし方を調整する。

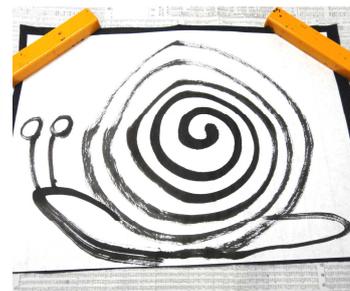


ラセンの次はジグザグ。この時は、手拍子とかけ声にあわせて、「イチ・ニ、イチ・ニ」とやるのがコツ。

筆を持って最初なのだが、あえて筆の持ち方は教えない。30人の子どもに筆の持ち方を徹底させるのは至難の業。それでもこの方法なら、少なくとも筆が自然に立ってくる。筆は立てれば「バネ」になる。バネになることで太さの調節が容易になる。これが筆使いの第一の基本。先生方に教えるときは、これを解説する。あわせて、墨を付けたら一筆で書くことも身につけていく。

②楽しく学ぶ

ただし、前述のような基礎練習は、そればかりをやっていると飽きる心配がある。そこで、同じ練習にも変化を持たせるために一工夫する。右の写真はその例だ。ラセンとジグザグを使って鬼の顔を描いてみたり、グルグル渦巻きでカタツムリに変化させてみたりする。それぞれ



書いた後には名前を書く。小筆の指導をしていないので、名前だけ。遊び感覚いっぱいだが、その中にも基礎訓練の要素ははずしていない。

③目的を明確に、優先順位を

あるていど筆が動くようになったら次はひらがな。小学三年生に、毛筆が初めてとはいえ「ひらがな」はプライドを傷つける。そこで、子どもたちに難しいひらがなを聞くと、「を、ぬ、あ、ね」などいくつかの例が挙げられる。そこで最初は「あ」を書かせる。次への展開を考え「あ」は最初から決めてあるが、子どもたちの選んだものの中から決めたように見せかける。それまでに実施したラセンの訓練が活かされる。



「あ」の次は、二文字を組み合わせて「あめ」。同じ動きなので二文字に増やしても容易にかける。ここでひとこと問いかける。「あれ？あとめは形が似ているね・・・」。じつはもとの漢字が安と女であることを教え、さらに似ているひらがながないか問いかける。「ぬ」に気づく。ひらがなが漢字から出来ていることをさりげなく教えるのだ。「ぬ」が出てきたので、「ぬ」のつく二文字「いぬ」も書いてみる。

「い」の字は、見えるが最もやさしい文字に見えるが、硬筆でも指導は最も難しい。それは「ハネ」の向きだ。一画目から二画目に空間でつながるように書くことが大切なのに、はねることだけに集中させるとハネではなく「オレ」になってしまう。そこで、はねる前に一度止まり、「イチ・ニ」でハネと一緒に二画目を書く。ハネが長くても短くても、時にはつながってもいいと指示することがポイント。

楽しみながらも、この単元で何を教えるのか、目的を明確にしておくことが大切だ。



④作品として

「あ」「あめ」「いぬ」、三つの作品が一度に完成した。それぞれ書いたらすぐに名前を書かせる。ここでも大筆のまま、名前だけひらがなで良い。大切なことは、書いたものは全て、作品として大切に扱うということだ。

今回のワークショップでは、これら全ては書けなかったが、実際の小学三年生の授業では、これだけ全て取り組んで二時間続きの授業が修了した。もちろん、道具の説明、筆おろしから始まり、この後の後片付けまではいるので、実際の中身は一時間程度。大人相手なら、エクスだけを30～40分で体験出来る。この取り組みは、今後も粘り強く、毎年取り組んでいきたいので、興味のある小学校の先生方は是非参加してほしいと思う。

5. おわりに

今回は、このほかにも音更高校の野坂が初めて取り組んだ短大の非常勤講師としての講座の内容や、地域で実施している市民講座の取り組みも紹介した。つまり、内容的には小学生、高校生、短大生、社会人と広範囲の書教育の実践が交流され、まさに生涯学習としての書教育分科会となっている。参加者の数こそ少ないが、これほど広範囲に取り組みを交流している分科会はないだろう。

今後も地道な活動を続けていくことを高らかに宣言して、ここにまとめとしたい。